



中村俊定文庫  
文庫 18  
436





附函

兼了

使登



老り常ふこのゆるきの利休帽子あきめん  
 秀吉公より利休の巻を何巻も給ひくゝ家前  
 おてもうふむせきとくと下一はぶそのころぬたれ  
 改中の座とぬきてこよらこ白くま子井の水引のそ  
 びきひくゆれこころとわうしきと人ひのまゝも  
 いそぬく最中とぬれとてやこもふさ方ぐり

終りたまはる物か又しきりなきにいとわ  
奈ふらと師の繩まきまの林風使ふまてそら  
唐のそら青苔日厚自無塵とらばより  
白眼して他乃世上の人ばると作らる  
茅は白とらすうしきりなきのこりけはれ  
おのりんとらうし麻のまやうにきららひる  
よのちとらあふとわしとらうしう菊を  
白紙と黄なるとけおれぬはちくも子瓜ハ

若さばよりぬかまのふうしとせ阿ま  
むやうあまのたうし味さくはまてあ  
或人抱うくとらまのにあててし  
あめさうしとらまのあうし  
私れ月いと詠人のまてあまのまてあ  
抱腹なうしてあまの人の隈とまのうし  
月やうすうあ端あうしとらまのうし  
蟬はあくあう人もわしとまのうし

了はい願うて死ぬるにむすんで

泉の渡りなうまてる深き川にわたり深きといひ

うづばせぬいこにきこぬの位し

山とてぬりてしるまのの深き橋より豊秋とて

うま〜近比園女とてるたれくちり〜に苦困とて

深き川にわたりけ橋とてりて風品とてりちぶ

なるぬりけ小敷タとてしとてあきとあひる

古きとてのちり〜にわたりわたりぬりち

かたのうとて〜とまるとは思ふにぬあはれ

なりとてのいさうのいさういさう〜りやと

う〜いさうおろろ〜いさう〜

友をた〜ぶりあまきもの〜しはり

るは常不〜とて〜とて〜とて〜

う〜まは〜とて〜とて〜とて〜

や〜あま〜お〜お〜お〜お〜

うちぬれもたの慰なれ

右使登龍の筆もささげまはす祢うして  
懐舊追福れ向くはつゝ祢乎仙十三まで  
なしてまひちりあるなり

第一 像系

おもひに六月きり利休中

蓼太

風なをのほる香煙香る

盤古

朋輩にあつてはよいと物向く

班象

夕ふきとものゝ武老系鞋り

人衣

旅人よ波々ぬ橋の宵向く

使仙

根吼る萩れりりき

鯉半

少

醉さめれ秋さよ夜初きなり  
嵐亭

紙入きりす波あゝこ百止  
太

栄えく清菘口の朝あゝ  
古

裏へどれくまれ中一高  
象

お事の小指ふりて小挑灯  
在

師走乃梅の香凡拾ひまの  
仙

き應志流りまハ月々まろ  
半

春夜れ顔り初の久く  
亭

ナ

小便とこす紙子供まの一大事  
太

暗り留れ老を嘆く  
古

花垣の底に根生の芽う刺  
在

大正舞に喜いた夕風  
象

名用の僧却と捨けけま  
仙

板とろくまきり焼く出る  
半

淡妻のちさやう子う丹傳は  
古

虚病をつまむ脈れなり目  
太

白言れ干瓢見和つ〜り  
 涉之冬々拳小寸馬豆人  
 悪くとつも追従〜り〜  
 摺小木よりして何の鼻をさそ  
 至理〜るを尋る市井は為ひ〜  
 城忠太鼓〜月も極身  
 看經の嗽〜時を死〜り  
 綿いさ〜る心ゆきや〜き  
 亭 太 古 半 仙 象 在 亭

ナ

昇居て書本本のま渡運駕  
 二色も〜ぬ酒屋子ま〜も  
 いさういと丸〜る子妙とゆ〜  
 四暗こ〜る籠も〜り〜  
 乃ハ程白記〜柱の花北音  
 清心猷之の〜る作〜  
 在 象 半 亭 執筆

第二 於石中堂

魂来やを秋より岩の縄まゝに 天厨

跡菜よりくく六月は 蓼太

初まり寐てゆく船は青の舟 周竹

曠忌よりく新供の肌を 厨

あくる心琥珀の古酒乃をさくろ 太

翁きいんがれぬ小すゝに 竹

志乃ひ喜の筆はびく此曲より 厨

阿らまぬもの上流く為 太

みらねくの念ぬけふ可くま 竹

息はさ坂より花清堂の如 厨

うらやまきき行く山くを 太

路をきれく大念法人 竹

十帝をくくは盛智おと 厨

節くくくは小虎くくの杖 太



空澄の波伝ふく澄のとき

竹

影月夜に庭を撃つ

府

異人とかげしくさたて風

太

去る行来のまじりまじ

府

赤穂の塩端より京乱波

竹

そやり暖氣お熱くかくみい

太

泊船り乾くぬ舟若流て来く

府

七賢人忠隠者附合

竹

く金やぶまを舞子の涙ときん

太

和史浮世乃あり一仇波

府

赤穂の巻風を吹かす

竹

湖床の板石以逆り剝

太

摺津く嵐おきえん扣揮

府

山を焚きして温泉入る

竹

之日月の輝く初時多

太

伊能も近い鎌の鎌中

竹

ナク

お刺も子い瓢れ元あし戸  
 挑焼もろび園札の糸  
 うんうんと沖く風のは志り  
 古い糸白乃鳴して行  
 新すすぬ十三年の花うさこ  
 泣かんとすまれもむくさ記の誓

太 府 太 府 竹

第三

於寒蓼堂

白蓮や一ひん麦北音佛  
 亦こーと心僧と凍風  
 麦より小大多人をなくさ大て  
 とれ、定とるる挑灯  
 家々の新二月ハ入りて  
 十日可菊の霜や曇らん

婆心 蓼太 誓古 六窓 吐月 執筆

うけや氣の花ひらくはる鞠袴

太

之ッ懐くらく乳母の垣百八

心

為あきと人こころば子とくし

定

牛と毎日連なりしひき

古

鳥くく子多に夢の淡路島

心

蕎麦売焚てとる湯衣あ

月

志めとらくし多仙を同祥天麩

古

るれ素深の綿ハおれも

太

ふらふらして嬰羞のちかひ薬箱

月

月も解きれ雲とかく影

定

鞠控く志賀越え花の礼をし

太

あまは海世の初月をさす

心

こころもまゝ桶伏のまゝ口

定

伽羅く煙く酒と茶碗と

古

ふねの夢も遊心お人の夢度凡

月

響るはりよる馬北をさす

太

+

あゝろばハ之刺控て屋な〜

心

後と平化して川〜るり

定

泓もあ〜ぬ山を垣ち〜

古

涕小翹れある目も子い目と

月

ぬり三の源内付と足〜行し

太

た〜ま〜肩〜奪お空輝

古

カ〜内と〜ろ〜橋の町〜付ま

心

風平突の入萩乃起〜

定

ナ

なとせ〜こ〜ま〜老角力

古

夕乃〜ゆ〜の事〜おろ〜中

月

白糸に起ちぬき〜

定

あ〜ま〜い〜この清〜夕風

心

文屋を中小白乃花〜友

月

茶乃山〜お〜の〜

太

茅 記 於十牛舎

七尺のなげ紙さ彩りり梅麻

眠 我

縄もびうしれ喜田印と里

藝 太

辰中うらとともも刀中産れく

美 知

信 忌しももい橋の評定

我

燭臺の凡ふきゆりし月忠岩

太

るうと出れ去りし包り

知

ウ

と系福ふりし小室の苔水菫

我

とく行して又重れ目の狐し

太

歳きしも芝居しあさい橋寄

知

さくや小巻の梅乃部波津

我

袖すの介も夕けみる絵るり

太

寛文しゆゆ忠意水古風さ

知

照月の板倉殿と尺もろり

我

妻水車辰のふらして出る

太

後事れ自由六舟くそりも  
 七転つく進込伯母も一懸  
 何くくくくこれ花の別れま  
 乃えんの言忠 帯をまき  
 大庭より輝くあふにわらふ  
 顔すおめう守紅緒のまふ  
 さふ状も通ぶこらてそくそり  
 今を筑摩の陽もまふこく

知 我 太 知 我 太 知 我 太 知

新くくと帷子まき照阿うり  
 中風は塵小委伸のこく  
 百里片く毛毛荒振る男り  
 美あみうまあ〜本から〜  
 湧く〜と奈寺の塔乃三〜  
 月砂や〜不写流醉 礎  
 流舞くまめは裕の信子〜  
 紫津の香〜伽羅虫紛〜

知 太 知 我 太 知 我 太 知

ナク

此の欄は夕々まき舟小持の廣  
 祇樂志のまほ祇堂の町まほ  
 ありくまの腰を伸してハ  
 汁の突ふとれ細志志まの  
 経る阿の志も来り花の法  
 うまひくまの春はあけふの  
 我 太 志 太 我 志

第五 花水上亭

中りややうい言れぬる手紙  
 くれえ人々互の秋忠志  
 白妙の縮糸片々糸くハ  
 候座も翁と違ぬてハナ  
 有の志揚こまけく春苗翁  
 秋うすくくと露は初まの  
 楓 續  
 葵太  
 野菊  
 完車  
 祇什  
 仙夜

柩のまはれ西化なくさむる山とらー  
 びうーやうーさ婆くの系族  
 折飛の指も車も果ぬ八重とと  
 羨山くさ記の巨魁更し  
 靨、尺せこまきい、毒奈の靨やうー  
 けいふらうーして大工の靨  
 表して西目も子記女房も  
 こゝの浮形と膝もうこうけ

飛 靨  
 太 靨  
 菊 夜  
 什 車  
 靨

何ふつけうふは市港の五巴ー  
 ちーめく花のみやこもよ  
 うーくやくと程多金の靨工月  
 なせろー啼ぬる宿れうくひす  
 側さうぬ系既の紋と云鱗  
 まる流乃髪とばうりうく目も  
 那郭の枕ふ年と昔うーと  
 冬うー妻の妻とくーあり

靨  
 太 靨  
 夜  
 什 車  
 靨

一三六

五

人



人質とてあやうく辱下詔  
 垣子作忠 福直乃 約半  
 曰少辨の橋のちけく小賣酒  
 忠度町乃ソのと夕たれ  
 尺八の歌うにやーもたうそ  
 飯も秘密なにーもあう寸  
 くらまう方の前豆詔小門の月  
 きけらうの志海の日和うそく  
 太 鏡 繻 車 什 菊 夜

十ウ

拾りなるうくと望うすしめ  
 宿行うはく笈おは本そ  
 豆腐屋の醤油加減も吸くり  
 凍亭ハ毎くぬる葛飾  
 師を父もた又日の花虫陰  
 精をそとく縁うし時  
 夜 菊 什 繻 車 筆

世宗中

第六 於獅子窟

蒸瓜や突りれりハ十二年

乳峯

人阿くくゆり反草中店

薺太

右漢之藝淋しう膝ききり

如風

飛所を舟と繋ごうれも

峯

いさよいもきりこり一峯の雲

太

算とみりて尾花前萱

風

ッ

於るの扇ハ腰より子

峯

耳露くと水に舌くら

太

沙汰津師と世ととえと

風

日冬波うふやり戸まき

峯

夕う月の色もはしう枯る

太

雲くら元は男傾城

風

果もきぬ影うかて破袴

峯

水氷付ふささ枝の回り

太

去子く信田と油のすくく  
香もすくくす梅北月  
墨と透く吹くくすく  
按戸の指れ身く蛇鳴  
多めくくくぬ八百の嘘泣き  
圓乃情也ん斤一録川  
く川鯉小判の毒くをるなり  
絵具くく月日ぶぬ一蝶  
太 峯 風 太 峯 風 峯 風

口くこれとぬけの信くねふとん  
あくと越らん春にくく様  
さわくくく何く陰謀をくく  
甲別武士乃蕎麦此子喰  
あくくくくと養流くく出水川  
考ふとくく焼く煙の香くく  
菊廿日の礼とくく人く袖の月  
象中ら初らき蕎麦此石  
太 風 太 峯 風 太 峯 風

ナラ

さうして小高詰の尿ハ去くらまん 峯  
 喧嘩の聲を結く出て行 太  
 瘦きれと涙治の子程ハ去らざり 風  
 ろまやそなりやまの慢 改 峯  
 善行一じ幕の景云と花障子 太  
 笛の琴乃とまれ 吉 樂 風

第七 於子親亭

姐板小びうううんふ若若 百頁  
 ころー火ううくまれ秋の秋 葵太  
 ひうあれうう田中上鶴とりて 翠羽  
 市う市へ境作さうの 黙我  
 いのうあ上青と月のうう 文母  
 沈子うう菊の末うう 南居

漸之に山の皇居の板ひさし

兼治

白清のうりく辰の好神すごく

白清

あを書れうらうらもひり纏習い

菊人

卯のうま垣忠皇受尺草

落梅

閑帳之系へ出しつゝいづかあはれ

太

有品利く果ぬ岩お後

貞

ある白いのかよの跡ま八月文し

居

後胆戸片里の跡之伝織

羽

然るがとに新ふ竿とり世し

我

きくゆみ根く今こくく

語

新居之口み白花のたさるけ

清

茵舟馬系一極忠風流

母

息多法を更く親の泣く来く

梅

さいく汁とうてりやく

人

志ふれし師の仕方本綿和志

貞

志定くぬ馬士乃根おろし

太

三茶中

二十

蛇と付よと田くれきりよふ  
何ぞ礼もナレまゝ出致  
あは座の下に小判の持を  
化物ふんと酒も云味  
貞孝の狀に天和れ元あふ  
酒とやう新 巨魁太夫  
勢い強し海もふと事日月  
はるちたさなこころ

居 我 明 清 母 梅 人 路

<sup>ナラ</sup>  
奈心の瘦と七巻の我子  
和顔く呵る母とさるもの  
長刀と扇芸よりる盡芝草  
家よりりの流れ清しめは  
源川をた運くめ汐風小  
むうあはまぬ嬉もれ友

太 貞 梅 羽 路 居

第八 松尾蘭亭

鬼守

縮たすふのりも子や五九月

奴やりと中へ古き世うりて

藤太

上臺對し赤裳の袖よりて

慎車

端々やし如橋へ閑く

守

蕎麦とく進麦以中けそ晴向り

太

息子より三ヶの牛町り引

車

ク

さきとせぬ老姥の老阿うり筒

守

を訴へし一舟へ山の西月

太

三味線と粗く免れと子へ鳥

車

代貸し扇へ風乃うほり香

守

少あけしてはねまの青寐うら

太

きり一休書たさけ呼りり

車

本免し隙中とさくせうくららびけ

守

秘術とそ守お月尺れ屋

太

福系れまゝ腰けり秋子く  
 定々花駕りし遊柳を来  
 信ちまの茶漬の花のちひさくひ  
 おほつらなくも花くまを  
 ナ  
 島ちを依りて去の秋別貝  
 笑りぬ婦の惚てやらく  
 化さし船空桶めんを纏すれ  
 打て花何なるむ花屋うか  
 守 太 車 守 太 車 守 太 車

そのうと百村の腰れ花を川  
 遊んて花屋繋果てもなり  
 さらさらと来ると内くく戸を敲き  
 狐々やら刺さくおまり  
 去らむかけす落首を詠りへ  
 元弘くさく連武えん年  
 山うけれ茶の汲月の芋切ら  
 別々くく水と馬れやくく  
 太 守 車 太 車 守 太 車



ナフ

うろくと今に角力の男を男 車  
 さげしうろけの門を陸を 太  
 祇明忠子い村をハサリ一り一 守  
 草軽く日以旅中吉日 車  
 遠くをきりゆく花の言佛 太  
 南とろくは夏に何樂 守

第九 於牛車毎

閑伽桶く夏白菊と打りし心 是物  
 経讀多老の阿く山ま 葵太  
 山風小驛路の次北園越く 白牛  
 夕少月と戸よ志ととうれり 唯我  
 夢に公喜忌てより何月友 眠江  
 うきうきこれと放家 女の

七  
 昔もきく八海とさ徳ひの昔も  
 割膝く辰も養る遊長  
 ころめんと改毛の子い左時織  
 馬より花子も驚くあすきん  
 八月れいけくも羨ふ水にけ  
 新と田中一巻をきき三の  
 踊るまのこくしと追く袖ぬきく  
 沙洲帰る巻のその吟  
 太物牛の江我物太

十  
 江戸くこいさねかろく荷くし  
 ころんふぬ衣にうぬめうかす  
 栄橋乃柳く花をささま  
 五石小荒く雄子の一喝  
 美実に出るりきくぬ泣男  
 業平捜す意の榮歩り  
 之うけて綿木りて小別志本  
 入梅も晴る水葉論今夕  
 江の太物牛我の江

是まよふれ 笈とぞりて 色うらん  
 い戸さう 落る 龜と 悔  
 篝火と 待賢門 志の 家ま  
 されく 眠る 山の 態然  
 曳つきて 牽く 筆竹杖 あり  
 夕ふと 芝居 以樂座 ありん  
 ろりら せぬ 月夜 糸の 袂あり  
 粟 一も 飛して 轟くくく

牛 我 江 物 牛 我 の 木

ナク

鴻業の 夢能う けし 林の 風  
 虚はくく ちも 足と ちあり  
 夜息と 寐て ちあり ちあり 和と 中  
 割 ちくく ちく 夢語 ちあり  
 大佛の ありと 笑て ちあり ちあり  
 澄う ちあり ちあり ちあり ちあり

の 江 物 我 太 年

十三条中

五十五

第十

於愚得坊

墓前

まゝにや若きうして若もなり

胤腹

なり世と汝白眼お月

藝大

私空の嘘のうしろに控あけて

雷堂

まきまきと叫びてうしろに

暖

風花おろしと眼識と望りて

太

緋曳をりて枚を霜雪

堂

おろしと神子も空想子もこのま

暖

まら子うらみ候とてこのま

太

毎て汗うぬぎてまのま

堂

うらま角を信じておろし

暖

紅葉たれ連ら包くと教るれ

太

おとせしるる月も山台

堂

寂蓮の芽と阿くまの亭とあり

暖

滝乃ちけり登ぬりて行

太

川風小振く積鼻禪の干あきれ  
 初はたのくくと流こまゝ  
 多ふ限こたの派せれ行めも  
 伊勢よまゝこの袖こ夏櫛  
 臨海とくくめ笑ーくくと  
 遠くくくまゝくく不心候や  
 中とよほといて遠の草ふす  
 如渡得取と草こ出まの

+

堂 暖 太 堂 暖 太 堂 暖 太 堂

芝根れや如との大横ありり  
 横こ素体と指南くくひま  
 年取不方何や色の髪は若  
 采つち馬こ所乃細道  
 遠まこ出くも不動の眼とー  
 翠ととくくは使老のみのむま  
 故所乃指徳こくく袖お月  
 とき心申もあれ拍子利

堂 暖 太 暖 太 堂 暖 太 堂

ナウ

巧る付はあらうむけい亭の棟

雲ころろある武庫れあさらん

旅と只より切書妻とあくはな

あゝゆり事と祖師の遠云

花乃紐あしはやく箱いと

床ゆり右と候とゆはと

太

暖

堂

太

堂

筆

第十一 於雪帆樓

まろつた人の境と法うら

太喬

一筋乃うね夏草あふ

蕨太

は雲れ千眼鳥と夕と色

吐月

月もよそく沙城あさひ

喬

やくと彩福の腹と成す

太

汗くへまう紅葉とま

月

ウ

何とやら家も過ぎ子の後でしと  
 ちとむろとせれうと世とふり  
 誘ひ人も怪ふ伯母の林とる  
 盃一ちとり 袷をいれも  
 嘆ふりし物いへん芥子れまをく  
 辰意 洗 飽乃 細子 附合  
 赤坂や 悪く 指さうたから  
 う 食さう } ね口と 鬼灯  
 太 喬 月 太 喬 月 太 喬

+

風とくくち極楽の重月  
 沙羅句 一の松乃夕  
 足て歩け新地死の花とく  
 詩とまゝく心醫者の中  
 豚鬼骨の障ふも風中れぬより  
 先 泰平不地震の  
 徳小二十六丈の處邊那仏  
 只 教さうが免まると先  
 月 喬 太 月 喬 太 月 喬

其くてもふとまきつむひもさしと華  
 紙帳と年れあるやうの意  
 確りたつての小家うらう  
 泣本玉うらに夜代も里  
 そとくこの神なるたの親り  
 おろしとまきつむひもさしと華  
 子多啼関をたれすのうら  
 こらふ時うらう言乃を山  
 太 喬 月 太 喬 月 太 喬

投うしとまきつむひもさしと華  
 其くてもふとまきつむひもさしと華  
 寺くしとまきつむひもさしと華  
 中法くしとまきつむひもさしと華  
 菅笠と花つむひもさしと華  
 即きつむひもさしと華  
 太 喬 月 太 喬 月 太 喬



第十二 枕墨水障

連文

枕の蟬ゆく去るまむの春  
 帆ももちきれて白雲の峯  
 次麦の跡ゆく照の棠もたし  
 去りゆく禱ゆきさゆきん  
 月代々あさうくく乃ひあがり  
 平明くく小蛙 走ん 細繩  
 莫汝 柝太 舊國 富屋 葵太

夕

枕の棠も跡ゆく照の棠もたし  
 右い櫻家より秘密叫く  
 くきうぬるささうりまれきのささ  
 あり秋とつらぬ秋雲の月後姫  
 又高き神樂とうけて雪敷ハ  
 中うらうらうか鴨の控 責  
 といのいの名もむて初し障子紙  
 糸くはゆる世 蚕忠あけ  
 太 柝 國 屋 汝 柝 文 汝

沙衣取上赤回の目和得々々  
 和日ろろ八月世たうひふれも  
 杖乃いぶ花のきとを念う  
 宿治とふ汝あははあや子  
 鬼あふ岩挿出して方遠ひ  
 少油へやうすはぬもかりく  
 煉へ自のそくくをの二重子  
 向日う瘡の油乃大敵

屋 太 犬 汝 拵 國 太 屋

心より渡磨の供乃迎うろ  
 くるめ思索世の馬強と中り  
 燭着て七合入りかやくくと  
 今ふ掛うり一帯流紫  
 あううこ小妻の妻れ若みり  
 老さやあふ夫婦いしく  
 赤味噌の便さく一記雷の月  
 八幡戸は世に宇治もうり

拵 國 犬 汝 國 拵 屋 太

十三茶中

十一

徳為れあま道とまを神くもや  
 焼飯うし川 吟人云人  
 襟中記不着之の和尙めをとも  
 菌すの畑と 鳥丸く右る  
 枝くに香と起して花一友  
 まるい夢のこくまは白雲  
 柵 犬 太 園 汶 屋

第十三 於琴酒亭

楊と尺事もなかりや寫さおろし  
 橋よりとすきぬ水は月の露  
 横柄毛れ車ははらふきしらすて  
 え眼うりのよ縁いしあり  
 懐出せし絆一平卒賦布  
 巨魁くう子牡丹からくさ  
 楚水 葵太 都雁 桑正 桂山 花口

ウ

院くの時あきつた夕紅葉

對賀

とせきまをまといと痛てる秋

水

捨くまをのく混のヒまう

木

尾踏込さぬとらへの汁

雁

巖より秋ハ将場れ出入れ

正

妙と始は下との意込まらるれ

山

さす月の印しきまのちを舞扇

水

経信まきさうまらるれ露

賀

石ころとせしめて難ハなる色うり

口

家よりうそくは程ありく

正

花よりも柳乃陰の啼もけまこ

山

岩るにまはる水竹糸ゆふ

賀

+

於嫌飛浪おらりのこ水焼

雁

女房表うふれ之日うせり

木

不了ぬいと縁ふらぬと回し

口

ろ馬のうき世秋空とたり

水

声うけし子くくる鮎れ十荷との  
 あふしんとい極楽とくや  
 経師屋の言藤縁の川とゆり  
 奈不色り脊中いらく  
 豆けまとい信濃の志蕎麦二袋  
 ちうひの月れ控しとくま  
 副寺くく治く角力の西東  
 蟬吹まうす山花阿三風  
 賀 山 正 雁 太 口 水 賀

ナウ

旅なれ目さゆ一草小海石記  
 ちくく阿彌の交り神主  
 本に録の肝表口ととまら  
 西志史やうと筆名お合  
 教いさ石碑小片く花山ら  
 十三年乃むくくひ書  
 山 正 雁 太 口 筆

十三条中

昭和九年春

任藤為三助入丁ノ巻

園

空

